

当院での発達障害の作業療法 母親との協働により集団参加が可能となった一例

野 口 翔

要旨：当院では、外来にて発達障害児へ作業療法（以下OT）介入を行っている。OTの成果は参加がもたらす満足という観点から判断される。そこで、病院での関わりの中で、対象児と家族の参加がもたらす満足の向上が可能であるか、事例を通して検討した。事例は、H君、6歳1ヶ月。当院を受診し、OTが処方された。COPMにて母親のニーズを聴取し、「集団の中で友達と仲良く遊べるようになること（遂行度3，満足度3）」を目標とした。H君は注意が転導しやすく、遊びが次々に変化する傾向があった。アイデアの共有は困難で、H君の提案による一方的な遊びになりやすかった。H君の行動の背景には、姿勢制御および眼球運動制御の問題があり、他者のペースに合わせることを困難としていることが考えられた。介入では、感覚統合療法を用いて、姿勢制御と眼球運動制御の改善を図った。また、母親には家庭でもできる遊びの指導を行い、母親の能動的な治療参加を促進した。COPMは遂行度8，満足度8に向上し、母親は「ルールのある集団遊びに参加ができるようになった」と語った。母親との協働によって、H君の集団参加が可能となり、母親の子育てに対する満足度も向上した。今後、より成果を高めていくためには、実際の参加場面を評価する手段を検討していく必要があるだろう。

I. はじめに

当院では、児童精神科からの依頼により、自閉症スペクトラム障害や注意欠陥多動障害等の診断を受けた発達障害児を対象に作業療法（以下OT）を行っている。今回、当院での発達障害のOTの取り組みについて、事例を通して紹介するとともに、今後の課題について検討することとした。

OTについて、世界作業療法連盟は、「OTの成果は、クライアント主導かつ多様であり、作業参加や作業遂行の改善における、参加、満足度に関して測定される」¹⁾と定義している。当院では、外来のみでのOT介入を行っているため、対象児と家族の参加に対する直接的な介入は困難である。そこで、病院での間接的なOT介入により対象児と家族の参加の満足度の向上は可能であるか、事例を通して検討した。

II. 事 例

H君、6歳1ヶ月の男児である。粗大運動発達は定額3ヶ月、お座り6ヶ月、独歩10ヶ月と遅れはなかった。家族構成は父、母、姉、本人の4人家族である。2歳頃より動きすぎてしまうことや、コミュニケーションが取れないことが心配されるようになった。お絵描きなどの作品作りを好み、ゲームのキャラクターなどをモチーフにした作品を作ることが多い。

III. 作業療法評価

1. 面接：カナダ作業遂行測定（以下COPM）

COPMを用いて、母親の実現したい子育て（表1）を聴取した。COPMにて抽出された項目から、母親の意思決定によりOTでの目標を「集団の中で友達と仲良く遊べるようになること（遂行度3，満足度3）」とした。母親は「基本的には人が好きな子なのに、保育園の友達とうまく遊べていないため、保育園のみんなと仲良く遊べるようになってほ

表1 COPM (初期)

母親の実現したい子育て	遂行度	満足度
集団の中で友達と仲良く遊べるようになってほしい	3	3
鉛筆、スプーン、フォーク、箸を正しく使えるようになってほしい	2	2
ひらがなが読めるようになってほしい	4	4

図1 感覚統合療法イメージ写真①
(モデル：リハビリ課長)図2 感覚統合療法イメージ写真②
(モデル：リハビリ課長)

しいです」と語った。

2. 観察評価

母親が設定した「集団の中で友達と仲良く遊べるようになること」という目標に対しての評価を行った。

作業療法士（以下OTR）との一対一での関わりの中では、OTRからの遊びの提案は受け入れられず、H君が主導権を握った遊びとなりやすかった。前傾姿勢でプレイルーム内を走り回りながら、バットや紐など手に持った物を振りまわす遊びを好んで行っていた。スイング系遊具などを用いた不安定な場所での遊びは避ける傾向にあった。一つの遊びの持続時間は短く、視覚情報によって注意が転導し、遊びの内容を次々に変更していく傾向にあった。

3. 解釈

立ち直り反応の未成熟と姿勢筋緊張の低さから、重力不安を呈しており、さらに求心性収縮のみを用いた限局された運動パターンが遊びの幅を狭めていることが考えられた。また、サッケード優位の眼球運動が注意を転導させやすく、体験からのフィードバックを十分に得られないまま遊びを変更してしまうために、他者の反応に行動を合わせていく経験を十分に積んでいないことが考えられた。

4. 目標設定

短期目標：OTRからの遊びの提案を一部受け入れることができる（3ヶ月）

長期目標：集団の中で他児に合わせて遊ぶことができる（6ヶ月）

5. 介入戦略

①感覚統合療法（図1～2）

当院プレイルームにて、姿勢制御と眼球



図3 足底板

運動制御の改善を目的にスイング系遊具や高さのある固定遊具を用いた遊びを中心に行うこととした。

②足底板療法（図3）

足部からの姿勢アライメントの調整を目的に、整形外科にて足底板を作製した。外履き用と内履き用の2足を作製し、毎日履くことを習慣とするよう母親に依頼した。

③ホームプログラム

H君の特性を感覚統合の視点で母親に説明し、家庭でできる遊びの指導を行うことで、目標達成に向けた母親の能動的な治療参加を促進した。その一つとして、体験を次の体験へと反映させることを目的に、H君の得意なお絵描きを活用し、OTでの体験をH君と共に絵にしてくることを依頼した。

IV. 経 過

初期には、H君が主導権を握った状況の中で、徐々に苦手な遊具に誘導しH君の遊びの幅を広げていった。次に、主導権をOTRに移す場面を意図的に設定し介入を行った。主導権がOTRに移ると大声を出して遊びから離れて行くが、OTRの反応をしばらく観察した後に遊びに戻ってくることが可能となった。終期には、OTRからの遊びの提案をすぐに受け入れられる場面が増加していった。

ホームプログラムの一つとして提案したお絵描きでは、初期（図4）には遊具に対する身体

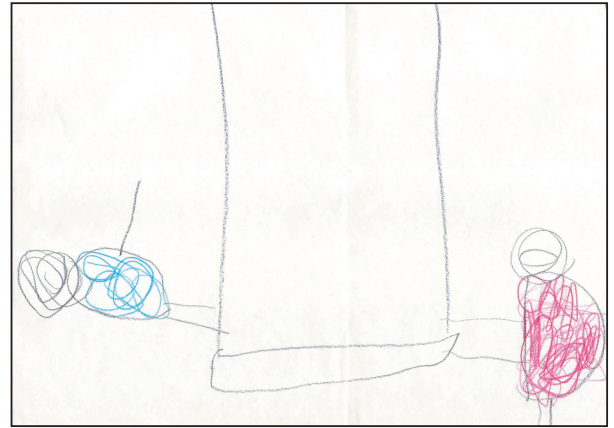


図4 描画初期



図5 描画終期

の位置付けや手足の位置、大きさなどが不適切であり、表情などの細部も曖昧に描かれていたが、終期（図5）には他者の視点で適切に描画されるようになった。

V. 再評価

1. 面接：COPM（表2）

「集団の中で友達と仲良く遊べるようになること」の目標設定に対して、遂行度3→8、満足度3→8と向上した。母親は「ルールのある集団遊びに参加できるようになった。発表会では最後まで自分の役を演じることができた」と誇らしげに語り、H君の子育てに自信を持つようになった。

2. 観察

H君が主導権を握りたい傾向はあるが、OTRが提案したルールのある遊びを受け入れることが可能となり、不安定な場所や、高さのある場所での遊びにも積極的に取り組む

表2 COPM（最終）

母親の実現したい子育て	遂行度	満足度
集団の中で友達と仲良く遊べるようになってほしい	3→8	3→8
鉛筆，スプーン，フォーク，箸を正しく使えるようになってほしい	2→10	2→10
ひらがなが読めるようになってほしい	4→10	4→10

ようになった。一つの遊びをじっくりと楽しめるようになり，OTRの反応に行動を合わせていく場面も見られるようになった。

VI. 考察と課題

OTの具体的な目標を母親と共有することにより，OTでの感覚統合療法のみではなく，ホームプログラムによる母親の能動的な治療参加を促進することが可能となった。その結果，H君は集団の中で友達と仲良く遊ぶことが可能となり，母親は自分自身の子育てに自信を持つようになった。吉川は「自分が行う作業を出発点として，自分自身を見つめ，自分の問題に取り組む，解決を図るということができれば，自分の人生を自分で作っていくことができる」²⁾と述べている。COPMを用いて，母親の意思決定に基づいて目標を設定し，母親自身が問題解決に取り組んだことが母親の自信の向上につながったのではないかと考えられた。

今回の介入から得られた課題として，H君が実際に集団の中で友達と関わっている場面の評価は出来ておらず，OTRとの関わりの中での観察と，母親からの情報収集からの推測に留まっていることが挙げられる。人の作業遂行は人と環境と作業の組み合わせであるため，評価としての妥当性は高いとはいえない。今後，より質の高いOTを実践し成果を高めていくためには，実際の参加場面の中での作業遂行を評価する手段を検討していく必要があるのではないかと。

VII. まとめ

1. 当院での発達障害の作業療法の取り組みについて事例を通して紹介した。
2. 対象児と母親の参加の満足度の向上について検討した。
3. 今後，より成果を高めていくためには，実際の参加場면을評価する手段を検討していく必要があるのではないかと。

VIII. 文 献

- 1) 齋藤佑樹：作業で語る事例報告，作業療法レジメの書きかた・考え方，43-44，医学書院，東京，2014
- 2) 吉川ひろみ：作業療法がわかる．COPM・AMPSスターティングガイド，2-11，医学書院，東京，2008